

特集
中国と朝鮮民主主義人民共和国を訪ねて

開かれた中国への巡回

この秋建国三十周年を迎える中国では毛沢東路線による社会主義建設そのものが問われようとしている

訪中国のユニークな成果

去る六月十日から二十一日まで、私は「第三次日中友好新自由クラブの翼訪中国」の講師として上海、西安、北京を訪れた。文化大革命期、いわゆる「四人組」時代そして今回と私にとっては三度目の中国であったが、この秋に建国三十周年を迎えようとしている中華人民共和国は、いま、ダイナミックな巡回を遂げつつある。そして一方、この歴史的な転換の過程がはらむ矛盾もまた巨大であることをまざまざと実感せざるを得なかった。激動の中国の政治と社会の展開方向を

中嶋嶺雄

(東京外国語大学教授)



直視してきた私自身にとっても、今回の訪中は大変有益なものであったが、私たち訪中団が上海、西安を経て北京に到着した日(六月十八日)は、折しも、全国人民代表大会(第五期第二回)が開幕した日であり、この点でも、日中関係や米中関係が大きく進展しつつある「四人組」打倒以後の中国の現状を視察するには、絶好のタイミングに今回の訪中が実現したといつてよい。

だが同時に、今日の日中関係は、たんなる儀式的な友好の表現や一時的な「中国熱」のみによっては支えきれない多くの問題を宿していることも事実であり、それはたとえば、今

春來、中国側がわが国からの大量のプラント買付け契約を一方的に中断もしくは延期してきたことによってもたらされた問題一つをとっても明らかである。中国のいわゆる「四つの現代化（農業、工業、国防、科学技術の現代化）」についても、それが当面の国の重要な国家目標であるだけに、中国側の論理と可能性に基づいて成し遂げられるのでないかぎり、結局は砂上の樓閣と歸することは目に見えていた。今回の全国人民代表大会で中国が「四つの現代化」の修正（調整、改革、整頓、向上）を大きくはからざるを得なかつたゆえんであり、わが国が経験した「近代化」とは根本的に尺度が異なることを知らねばならない。

一方、中国の変化は、同じ「四人組」以降といつても、さらに大きく進んでいる。新自由クラブの昨年の第二次訪中団の頃は、たとえば「工業は大慶に学び、農業は大寨に学ぶ」とのスロガンが依然として盛んに唱えられていた時期であり、大慶方式・大寨方式に多くの共鳴を憶えた人びともわが国には多かつたようであるが、今回の訪中でも明らかかなように、最近では、工場でも、人民公社でも、もはやこのスロガンはまったく強調されず、逆にこれらの方式が画一的に実施されたことの弊害がしきりに語られるといった次第である。ここには、昨年十二月の中国共産党（第十一期）三中全会という重要な政治上の結節点があつたことを知らねばならないし、やはり中国内政のそうした複雑な曲折を無視し得ない

のである。

それだけに、日中友好のための訪中団を形成するに当っては、それがたんなる参観団でもなく、押しきせの学習団でもないのなら、日本人自身の立場と広い国際的視野から中国とこの巨大な隣国の圧倒的現実とどのように対応すべきかを真剣に考えるための座標軸がどうしても必要になってくる。この点で今回の新自由クラブ訪中団は、佐藤敬夫団長以下団員一同がこれまでの日中友好関係の基礎のうえに、さらに中国の現状を自分の眼でつぶさに観察し、自分自身の判断でとらえようとする意欲に充ちていて、大変立派なものであつたように思う。それに、今回の訪中団はいわゆる議員団的体質をまったくもたない、いかにも本来の「新自由クラブ」らしい清新の意気に燃えたものであつた。当初から中国で要人に会うことだけを目的とはせず、大学その他の教育機関をできるだけ多く訪れ、可能なかぎり一般民衆との交流を主眼とし、また、八〇年代を目前にしてわが国が国際社会との対応をさらに大きく迫られつつある現状から、国際問題の研究機関を探訪しようとするなど、従来訪中団にはない要望を先方に伝えておいたことも大いに意味があつたといわねばならない。

上海の復旦大学、西安の西安外国语学院、北京の北京大学などを訪れて中国の教育の現状を知り、そこに含まれる問題点と将来の方向を展望し得たのは、そのような要望が実つた

成果であり、また、北京では、国際問題研究所が初めて日本人に扉を開いてくれたのであった。

だが、なんとといっても最大の収穫は、その大部分が中国を初めて訪れた団員一人ひとりの日々の体験であったろう。これまでしばしば、今回のような旅行（青年の船など）に講師として随行したことのある私が大いに感心したことは、団員一同がこれまでに報じられた中国、知らされた中国とみずから体験した中国との大きなギャップをどう埋めるべきかを日々討議し、真剣に考え、そうした営為のうちに日中両国の友好関係をいかにして本物のものにしてゆくべきかを模索しようとしていた情熱であり、こうして密度の濃い毎日が瞬時に過ぎ去った思いであった。

そして六月二十日夜、今回の旅行の最後に北京の前門外の有名な北京烤鸭店で開かれた全員参加の日本側招宴の際の佐藤敬夫団長の挨拶は、これまでの日本のどの政治家もなし得なかったような深い中国認識に基づいて、今回の訪問で得た印象と問題点を率直に指摘し、そのことが先方にも大いに感銘を与えたのである。佐藤団長は、いわゆる「四つの現代化」についても、要旨、次のように語ったのであった。――

「『四つの現代化』がもっている大きな可能性とともに、そこには多くの困難があることも、工場や人民公社を訪れて実感しました。現代化が機械化そして省力化をもたらすのだとすれば、こうした方向と中国の膨大な労働人口とのあいだに

は鋭い矛盾があります。こうした矛盾を解決してゆくためには、産業構造の転換がはからねばなりません。それはわが国が経験したプロセスでもありますが、結局、中国の場合、『四つの現代化』は『ゆっくりはやく』がもつともふさわしいものと私は考えます」

この『ゆっくりはやく』をなんと訳すべきか、私は隣席の北京市革命委員会の幹部とその場で議論したが、それは「穏歩前進」が訳語としては適当であろうと彼はいう。そして、この「穏歩前進」こそ、かつては毛沢東路線と相容れないものだと批判されたことがあるとはいえ、「四つの現代化」を調整しつつある今日の中国の指導者たちが、「大躍進」政策、文化大革命とつづいた激動の政治過程のうちに再び探り当てた目標なのではなからうか。そこをあえて率直に指摘した佐藤団長の挨拶は、まことにユニークであり、それはまた同時に今回の訪中国のカラーを表現したものであった。うわべだけの歯の浮くような美辞麗句が飛び交う最近の数多い宴席とは一味ちがったその夜は、中国側も大いに共鳴・共感した模様であり、宴がすすむにつれて、日中双方から即興の歌あり踊りありで大変楽しい一夜となった。同席した在北京日本大使館の二人の友人たちも、「普通はこんなに双方から歌や踊りが即興では出ないし、こんな打ちとけた宴会は珍らしい。それにしてもユニークな代表団だ」と心から感心してくれた。日中関係はいまや『御祝儀時代』としての第一段階を

終えていよいよ本格的な第二段階に入ったというべきであろう。

中国の転換とその矛盾

私たちが北京に到着した六月十八日にちょうど開幕し、去る七月一日に閉幕した今回の全国人民代表大会は、「四つの現代化」計画の調整と民主・法制化という二つの課題を議した重要な会議であったが、それは、中国の社会主義建設を従来の大衆闘争的なレヴェルから「人民民主」の制度的保障へと転換させないかぎり、もはや中国社会の安定と発展はあり得ないという深刻な反省に基づくものであった。こうした転換の主導者の一人が、かつての北京市のリーダーで文化大革命の重要な奪権対象となった彭真氏（全人代常務委副委員長兼法制委主任）であったことも印象深いものがある。

冒頭に述べたように、私にとつては、一九六六年秋の文化大革命の高潮期、七五年一月の「四人組」による「批林批孔」運動の時期に次いで、今回が三度目の訪中であつたが、それだけに、今日の中国の変化は大きくかつ鮮やかであるように思われた。その変化は、要するに、「毛沢東思想」を建国の理念としてきたこの国にとつての未曾有の転換を意味するものであるがゆえに、そこに含まれている問題もまた大きいといえよう。

まず第一に、依然として「毛沢東思想」がかかげられてい

るとはいえ、いまや「毛沢東思想」は急速に風化し、タテマエ化してしまつてゐる。

このことは、かつては全中国を席捲した『毛沢東語録』に十二日間の旅行中一度も出会わなかつたこと、天安門前広場の毛主席記念堂をもちや訪れる人もなく、ラジオは毎晩「敬愛する周総理、あなたはいまどこにいますか……」との詩を女性のアナウンサーが切々と朗読しているといった民意にそれを窺ひ知ることができざりではない。最近の中国の論調や指導者の発言に見られるように、いわば一九五五年後半の急激な農業集団化以降のプロセス、すなわち毛沢東路線による社会主義建設そのものがいま問われようとしていることによつても明らかであろう。

薄一波や薛暮橋といった五〇年代初期に活躍した経済幹部が、昨年末の三中全会で復活した陳雲・副主席とともにいま大いに人気を得ていることや、五七年の反右派闘争で「反党作家」として失脚していった著名な女流作家・丁玲女史の元気な姿が、長篇の苦難を共にした毛主席の三人目の妻でありながら江青女史の出現によつて悲劇の主人公になった賀子珍女史とともに『人民日報』の紙面（六月十五日付）に写真入りで出ていることによつても知ることができる。これらの幹部はけつして文革の犠牲者ではなく、まさに毛沢東路線と毛沢東その人による受難者であつたといわねばならない。

このような状況が底流に存在するだけに、もはや文化大革命

命そのものもトータルに否定されつつある。中国側の当局者が林彪・「四人組」の罪状をしきりに語りつつも、「文革以前はよかった……」「文革によってこうなった……」という言葉をしばしばさしはさむのを聞いていると、文化大革命そのものがいまや「悪の代名詞」であることが歴然とする。北京の長安街には、例の「民主の壁」に今日も壁新聞が出ていて賑わっていたが、そこには一時抑圧されたと報じられた反体制雑誌『北京之春』の第五号、第六号がガリ版刷りで出ていたばかりか、「劉少奇同志に思いを寄せる」という大きな壁新聞が六月十日付で一番目立つ場所に大きく新たに貼り出されていた。「劉少奇の名誉回復も近いでしょう」と私の質問に、北京のある幹部はうなずいていた。

先にも触れたが、人民公社を訪れても、文革期の名残りとしての「農学は大寨に学ぶ」とのスロガンを強調する者にはもはやいない。このスローガンは、昨年後半まで華国鋒主席によって唱えられていたことを想うと、やはり昨年十二月の中国共産党三中全会は一つの重要な結節点であり、そこでの華国鋒「自己批判」説はやはり本当だったように思われる。旅行中、大寨方式の段々畑をあちこちで見かけたが、段々畑にはいまや雑草が生えて荒れはてているものが目につく。西安郊外・長安県の王莽人民公社（対外的には西安京都友好人民公社という）では、自留地や自由市場の有用性を説くので、「それはかつて激しく批判された『三自一包』（自留地・自由

市場・自主採算制（三自）と農業生産の個別請負い（一包）政策が実質的に復活しているのではないか」と質問したところ、しばし座がざわつき公社幹部が鳩首協議したのちに「『三自』は復活させてよいと思う」との答えが返ってきたが、北京ではある幹部が「三自一包」政策そのものを肯定する口ぶりであった。

演劇や芝居も旧来のものがこの五月から復活したという。西安では四川省の古典喜劇『喬老爺奇遇』を観たが、これなどはまさに帝王将相・才子佳人の出し物であり、そこにはもはや「階級闘争」も社会主義的要素のひとつかけらも存在していない。

こうした逆転状況のなかで、民衆のあいだには一部に「西洋かぶれ」「日本へのあこがれ」そして「旧中国の顔」さえのぞいているような状況もあり、一方、下放知識青年の非行化問題や中堅幹部の意気沮喪、日和見主義など文革の後遺症もまた大きい。

すでに見たように「四つの現代化」は、膨大な労働人口の雇用問題ともからんで、現代化—機械化—省力化というわけには簡単にゆかないことも自明であり、この点は中国の指導者自身がすでに自覚しているところである。

ともかく中国はいまダイナミックな旋回を遂げつつ蠕いているが、中国社会のこの圧倒的現実がはらむ矛盾もまた著しく動盪的だといわざるを得ないであろう。

「覇権主義」反対の虚と実

内部にこのような矛盾をかかえる中国は、しかし、対外的にはいま、ソ連およびベトナムの大小の「覇権主義」にたいする国際的な闘争を声高く呼びかけている。

もつとも、こうした中国当局の外に向つての激しい姿勢にもかかわらず、中国内部で一般大衆がどこまでソソ・対越認識を厳しく持っているかは、また別の次元の問題であるような気がする。今回の旅行中、「四つの現代化」や三中全会精神を強調するスローガンをあちこちで見かけたが、今日の中越関係の激しさにもかかわらず、ベトナム非難のスローガンはまったく見かけなかったし、中国内部に一步足を踏み入れると、中ソ対立も中越戦争もまったく影をひそめてしまう。今回の旅行中、中越戦争を報じたニュース写真を見たのは、西安の観光スポット、華清池（楊貴妃や西安事変で有名）の掲示板のみであった。

一方、私が北京の北海公園を一人で散歩していたとき出会った人民解放軍の男女の兵士はアベックで雨宿りしながら、ロシア民謡のテープ・レコーダーを流していたので驚いて「こんな曲をかけてもいいのか」と聞いてみると、「音楽には国境はない」との答えが即座にかえってきたりもした。

ところで、私自身にとって、今回の訪中での収穫の一つは、北京で国際問題研究所を訪れることができたことであ

る。中国側の招きで佐藤団長、竹内啓、長江幸彦の両副団長と私の四人は六月十八日午後、北京市西城区展覽路にある国際問題研究所を訪れたが、この研究所の存在自身、たとえば日本大使館も在北京のわが国特派員諸氏も知らない様子であり、それだけに、私たちが同研究所を訪れて、三時間にもおよび国際問題を率直に討議したことは画期的なことであつたといえよう。

この研究所は、文革末期の一九七三年に開設が準備され、いまだ未公開とのことであつたが、地域研究を中心に数名の教授級スタッフ、数十名の研究員、副研究員それに研究人員など合計百余名のスタッフを擁する大規模な独立の研究機関である。文革によって破壊され、まだ再建されていない旧外交学院の建物に、現在は、有名な世界知識出版社（国際問題の半月刊誌『世界知識』を出版している）と同居しているが、しかし社会科学学院にも外交部（外務省）にも所属せず、世界知識出版社とも従属関係はなく、「この次、先生がいらっしゃるときには別のもつと立派な建物に移っているでしょう」とのことであつた。

会見した同研究所責任者（負責人）の斐然農氏や潘在微研究員（日本の政治・外交専攻）、劉茗柯副研究員（日本経専攻）らは、私の研究や著作についても熟知していたが、通訳をつとめた研究人員の呂招治さんは、専門用語もきわめて適切に訳しており、一般の通訳の水準をはるかにしのぐものであつ

たことも印象的であった。

最近の国際情勢全般についての裴黙農氏の意見は、当然のことながら、ソ連とベトナムの大小の「覇権主義」がいかに国際緊張を激化させているかという点に主眼があったが、ヨーロッパ、アフリカから中近東、東南アジア、北東アジアにいたるソ連の中国包囲網とその軍事戦略についての説明は、きわめて具体的かつ一貫したものであった。

このように、中国の指導者層が「覇権主義」反対を日本側に強く訴えていることについては、いまさらいうまでもない。私たちが上海空港へ到着するや、出迎えてくれた中国人民対外友好協会上海分会副会長の揚殿陸氏は、「四人組」批判とともに「覇権主義」に言及したし、西安郊外の王莽人民公社では、公社の幹部が挨拶の最後に、「『覇権主義』に反対して貴国の北方領土返還闘争に立ちあがっている日本人民に連帯の挨拶を送ります」と語っていた（もっとも「覇権主義」に反対する日本人民」というこの肝腎の部分は、先方の通訳がその能力からして訳しおせなかったが）。

こうした「覇権主義」反対の熱烈な雰囲気と中国の一般民衆の反応そして、中国内部で感じられるソ・対越関係についての印象とのあいだには大きなギャップがあるように私には感じられた。私は、右の国際問題研究所で「陳雲氏が党副主席に復活したり、彭真氏が法制化問題で再び活躍したり、文字どおりの『中国のフルシチョフ』と思われる彭徳懐氏が

名誉回復して人気を博している最近の中国内政の変化からすれば、一方で、中ソ関係が改善され得る条件が成熟しているのではないか。

従って、日本人の立場からは、中ソ関係の将来には無関心ではいられないのである」と問いただしてみたが、先方の答えは「ソ連とは国家関係改善の交渉はすすめつつあるけれど、ソ連は覇権主義を放棄しないであろうし、中ソ関係悪化の責任はあげてソ連側にあるのだから、問題は相手の出方いかんである」というものであった。

こうした中ソ関係は八〇年代にはいかに発展してゆくのであろうか。すでに中ソ対立は中ソ冷戦とも見做し得る極限状況に達しているだけに、わが国としては、中ソ関係が将来変化し得る蓋然性をも考慮して八〇年代の戦略を考えねばならない時期にきている。今回の中国側との討論は、この点でも双方によって大変有益であり、北京を発つ朝、先方からもそのようなメッセージが届けられた。

私たちは、いま、多くの新しい課題を背負って八〇年代を迎えようとしているのであり、日中関係にも中ソ関係にも、さまざまな変化や曲折がなお避けられないであろう。そして中国自身も、まだまだ多くの問題をかかえている。そのことを改めて確認し得たという点でも、今回の訪中は有意識であった。